



第663号

令和2年9月23日

題字は二代真柱様

大阪市北区池田町13-17

天理教はるのひ分教会

TEL・FAX

06-6358-2630

暑気ぐらしへ学びと試み

はるのひ館



▶はるのひホームページ▶
▶QRコード▶
▶天理教はるのひ分教会▶
▶池田町13-17▶



『世界観革命』

テニスの全米大会で二度目の優勝を果たした大坂なおみ選手は、毎回黒いマスクに白い字で黒人差別の犠牲になった人たちの名前を表示して戦い続け勝ち上がっていききました。

○ブレオナ・テイラー○イライジャ・マクレイン○アマード・アーベリー○トレイボーン・マーティン○ジョージ・フロイド○フィランド・キャティル○タミル・アイス、これら7人の人たちです。

黒人というだけで、なぜ私は殺されなければならないのか？

なおみ選手の必死なプレイに、彼らの無念な叫びが聞こえてくる気がしました。

「私はアスリートである前に黒人女性です」なおみ選手の強い自己確認の言葉です。

差別の問題が根強いのはおそらく無意識がおおいに関係しているからと私は考えます。

私自身もどんな差別意識を持っているか知れません。今はただ目の前にいないからだけであって

無意識にいやだ、きらいだと思っているような人が眼前に現れたら、きつと差別意識が目覚めるに違いないでしょう。

世界をどう見るか？という《世界観》はこのようにほぼ無意識のまま、すべての人々が持っていて

しかもこの《世界観》にもとづいてその人は行動し、差別殺人のような過激な行動さえ起こします。

同じ人間なのになぜそんなに憎んだり恨んだりするのか？尋ねてもおそらく明確な答えは返らないでしょう。

個人も世界も変えがたい運命を変えるには、この《世界観》を繰り返し自覚して変えることではじめて実現するのです。

八月次祭祭典講話

会長 芝 太郎

『思考の遠近法』

いつもの『天理教教典』の勉強で、今月は木村愛さんの原稿を代わりに読んでもらいました。なかなかよく思案をしてくれています。反省もしてくれていますね。

今のお話を聞いておみちの考え方というのは思考の遠近法だなあと思えますね。心というのは身近なこと、間近のことにとらわれますね。まあそれは大事です。今起きたこと身の回りで自分に起きていることをよく見聞きするというのは大事なことです。

でもそれだけだと今の愛さんの原稿に書いてあったように、忙しすぎたりしたらイライラしたりくよくよしたりする。その時に、現在見えている目の前の絵の背景の方を見やる。近くだけじゃなくて遠く。家族がいて健康で仕事もあっておかげさまで生活が成り立っているという風にね。今、目の前の現在だけじゃなくて、もう少し遠くの背景を見る。もっと遠くを見るのは元の理の話であったり、かしの・かりもの

の話であったりを思い浮かべる。この世においてもらっている、みんな元気である、何もしなくてもね、生きるためにほとんど何もしてなくても、心臓も動いてるし、血液も巡ってくれているして話そうと思えば話せるし、見ようと思えば見れるし、そういう遠くの背景を見ると今イライラしたりくよくよしたりすることが、そればかりにとらわれていてはいけないなあと。陽気ぐらしができない、自分が怒ってるだけじゃなくて、周りも嫌な思いをさせてしまう。遠くを見たらね、しかしありがたいじゃないか。怒るのも生きてるから、悲しいのも元気でいるから、というふうに、そうね、今現在の絵、ただでなく遠くの背景を見ると物事がちよつとこう距離を置いてみる事ができますね。教祖はそれを教えて下さったように思う。

僕はこれを「思考の遠近法」と言ってるんだけど、これを習慣化することが大事やね。今に一生懸命生きながら、今にとらわれないで、遠くを見ながらありがたいなあ結構やなあと。その気持ちで今を生きていくということだね。これが大事です。

まさに今の木村愛さんの原稿はね、その典型的な振り返りをしてきているように思います。

振り返りと話し合い

さて、まず最初にきょうのおつとめの振り返りをしましうか。今日のおつとめをみんなそれぞれ、おてふり、鳴り物、

自分の事を振り返って。光男どうやった？ 良かったよ。間違いがなかった。最初の地方が良かった。「あしきをはろうて」の二十一回のすぐく声の高さもいつものあんたの声より、笛に合わせて最初の方、良かった。

光男「なにも考えてなかった。わしは音とか音感とか高さとか全然わからん」

会長「でも今日は良かったから」

光男「それは偶然や」

会長「じゃあそれを覚えておいてよ」

光男「わしは事情部でよく地方があたるんよ。あんたの声で一番合うからいいって言われる。元気があって」

会長「まあ、あれを続けられるようにね」

あの、水とかお茶とかを飲むとかえって良くないと思うんやけどな。ちよつと控えながら唾液を出して、自分の力で喉を潤すようにすればいけるような感じがするんやけどね、いつも必ずできるとは限らないんだけど、あえて水やお茶を飲まないで、自分の枯れかけてきた声をちよつとセーブしながら

ら、喉が自分で自分の喉を潤せるようにするとちよつとこう乗り越えられるような気がするんだけど。

ほかの振り返りはどうですか？

「今日は欣也くんの笛がちよつとだけ音が高かった、リズム的に聞してもよかったですね、あれぐらいがいいですね」
「おつとめをみんなでやると早さがわからない。自分でやっていると遅いんですけど」

今後をどう進めるかということだけど、皆さんどう考えているのかわからないけど、コロナ感染について僕の見通しとしては、今年いっぱいにはかかるし、来年もおそらくあんまり変わらないんじゃないかと思う。今年来年二、三年かかるかなと思う。スペイン風邪の記録を見るとやっぱ三年目によるやく鎮まってきたね。第一波第二波とかいうことだから、月次祭も今年来年はちよつとみんなが集まるといいうのは、その間に小康状態で少なくなつた時ね、この前のようにこの前、六月はみんなでやったかな第一波、第二波の間のような時に、たまに集まれるかもしれないけど、そういう風に、今年来年は続くと思うね。見通しとしてね、見通しは立たないんだけど、あえて見通しは立てていけないといけない。

幸い、来年の六十周年は、十一月二十三日で、来年の末に設定したから、その来年の十一月二十三日の六十周年はひよつとしたら集まれるかもしれない。それも分かりません。やっぱりダメと、集まるのはちよつと無理やということになるかもしれないけれども、希望的観測として、来年の十一月二十三日は実行できるんじゃないかな、そのつもりで準備を進めていこう。

その準備を進めていく上で、毎月は集まらない、じゃあどうしたらいいか。それを考えていけないといけない。それはだから女子の鳴り物なんかはできるかなと、何十人も集まったらだめけど十人ぐらいだったら、もう来たくないという人は、無理に来いとは言わんでな、ということだからね無理に来なくていいのだけれど、まあいきましようという人を中心に、鳴り物とかそれから女子の例会とかは、十人前後だったら続けようかなあと思うですね。

あと来れない人、全然来れない人へは時々連絡させてもらってね、電話したりLINEで繋がりを持つように心がけています。

電話したりお互いに連絡してどうしてる？というふうにとにかく、それを心がけていきます。

その上でそれに対してこのオンラインをね、今活用していきたいと思います。LINEはもうかなりできる人が増えてますので、女子の場合は特にLINEでね連絡したりしてくれてますよね。それをもうちよつと意識的にしつかり方法として充実させていけたらなあ。

男性陣の連絡網も作りたいと考えています。LINEでつながっていきたくて考えています。

実際に集まらなくてもね。月の一回か二回はみんなでオンラインすれば、かなり違うわな。ちよくちよく連絡したり、後で何回でも見れるようにな。だからLINEを中心に連絡網を整えて、月のうち一回か二回かね、みんなで話したり送ったりしようということですね。

それを積み重ねていきましょう。目安としては来年十一月二十三日には何とか集まれるんじゃないかと希望的観測で。もしもあかんかったら、あかんと言えはいんだから、希望的観測で来年の十一月二十三日を目標に積み重ねていこうということですよ。他にもちよつとあるんですけど、またそれは今度で行きましょう。

今日はこれぐらいで、はいありがとうございます。

天理教教典学び

木村 愛

【第七章 かしもの・かりもの】

65頁11行目〜66頁10行目

銘々の身上は、親神からのかりものであるから、親神の思召に随うて、つかわして頂くのが肝腎である。この理をわきまえず、我が身思案を先に立てて、勝手にこれをつかおうとするから、守護をうける理を曇らして、やがては、われと我が身に苦悩を招くようになる。これを、

人間というのは、身の内神のかしもの・かりもの、心一つが我が理。

(明治22・6・1)

と教えられている。

人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの。たった一つの心より、どんな理も日々出る。どんな理も受け取る中に、自由自在という理を聞き分け。

(明治22・2・14)

自由自在は、何処にあると思うな。めんくの心、常々に

誠あるのが自由自在という。

(明治21・12・7)

先ほど、

銘々の身上は、親神からのかりものであるから、親神の思召に随うて、つかわして頂くのが肝腎である。”

と経典の中に取りましたが、今の自分に神様が言っておられる気がしています。前回の感話でもそうでしたが、毎回、本当にいいタイミングで神様が私に声をかけてくださっていると考えるようなお言葉と出会えることが不思議です。そして、そのお言葉は自分の胸に刺さり、深く考えさせられます。今の自分に、神様からのメッセージだと受け取り、これも神様のお引き寄せだと思っています。

“心遣い一つによって定まる。心一つが我がの理”

新型コロナウイルス感染症が叫ばれる今の世の中、人々の不安は高まり、明日は我が身と思いつながら過す日々や新しい生活様式への変化から“コロナ疲れ”や“コロナ鬱”など、体だけでなく心の病にかかる人も多いことをニュースで目にしました。しかし、“心一つが我がの理”と仰せられるようにその病を作っているのは、自分自身の心です。コロナだから今までの生活ができない、出かけられない、子どもが

家にいるから在宅での仕事ができないなど…。

「やりたいことができず、こんな状態になってしまったのは全てコロナのせいです、コロナが憎いですね」と、テレビでコメンテーターが話していましたが、本当にそうなのではないか。

と言っている私自身も、緊急事態宣言が発令された後、学校が休校となってから、動画配信の授業が始まりましたが、慣れない動画撮影や音声録音での授業作り、子どもへの返信など、気が付けばひたすらタブレットを操作している日々でした。医療従事者の方とは比べ物にはなりません、それでも休校前より仕事量が増え、多忙になり、日々仕事に追われてピリピリし、旦那や子供、両親に当たっていました。今ふり返ると、いつもより家族と過ごせる時間が長く、有難いことだったと思えますが、あの頃は、子どもや家族と一緒に過ごせることへの感謝よりも仕事が進まない苛立ちの方が勝っていました。

一方で「お家時間」や「お家でできること」など、こんな時だからこそできることもあることを呼びかける声も多く聞きました。しかし、家族みんなで過ごし、普段はできない話をしたり食事を共にしたりすることほど幸せなことは

ないはずなのに、それでも不足が出てしまいました。神様がお与えくださっている環境に対してそれをどう捉えるかは、私たち人間で、正に「心遣い一つによって定まる」ということだど、このコロナの生活となって改めて実感しました。

私は小学校で体育の教員をしています、学校が再開してからも感染防止のため用具を用いた運動や、密を避けるため鬼ごっこやボール遊びなどができない状況でした。そんな中で、「コロナだからこんなことしかない…」と受け取る人よりも、「コロナでもこんなことができる!。」と前向きに考えられる人になってほしいと子どもたちに伝えました。「○○しかできない」と「○○ができる」たった二文字、「し」か「を」「が」に変えるだけで、捉え方が変わります。捉え方が変わると、出てくる言葉が変わります。プラスの言葉は事を良い方へと運んでくれます。見える世界も変わってきます。そして行動も態度も変わってきます。自分の心一つで目の前に起こってくることも変わってきます。心一つでこんなに変わり、親神様が望んでおられる陽気暮らしへと近づくことができます。たった二文字変えるだけで。

しかし、これが、「分かっちゃあいるけど、難しい。」頭で

は分かっているのに、その場面になると難しい。感謝と反省の日々を繰り返しています。

「この理をわきまえず、我が身思案を先に立てて、勝手にこれを使おうとするから、守護をうける理を曇らして、やがては、われと我が身に苦悩を招くようになる。」

とありますように、好き勝手に心を遣ってしまうから、苦悩を招くようになります。腹を立てたり、マイナスな言葉を発したりすると周りの人はもちろん、結局は自分が怒りのエネルギーを使ってしんどくなってしまいます。周りの人も自分も嫌な思いしか残りません。そして、また腹を立てて、怒って…と負のサイクルが連鎖してしまいます。私は正にこのサイクルの中で日々もがいている気がします。結局は苦悩を招いているのは自分自身です。自分の心の捉え方、心の遣い方が神様の思いに反しているのです。

日々仕事で疲れている中でイライラしてしまう、実家に帰っても両親や妹に腹を立てている、家族からは「あんた常に起こってるな。」や、子どもが癩癩を起した時、「お母さんの言い方そっくりやな。」と言われる始末です。なぜ腹が立つのだろうか…。私も好きで腹を立てているわけではないのだらうか…。と日々考えている中で、あることに気が付きました。

腹が立ってイライラしている時は、自分がいっぱいになって余裕のない時です。そんな時に旦那や両親に「〇〇やってくれない！」と頼まれると、「自分でやってよ。」と突き放してしまいます。実家に帰った時、「ちよつと携帯の設定してくれない」と両親に言われ、いつも仕事が忙しいんだから実家に帰った時ぐらい休ませてよ、という思いから、「えー。自分でやればいいやん。」と、自分のことを優先していました。携帯の設定なんて十分もあればできるのに。その十分を人のために使うことを惜しんでいました。「分かった!。」の一言が出ず、「えー。」と言ってしまった後にいつも反省です。

反省するんだったら初めから快く返事をすればいいのに。また、出勤前に子どもがぐずったりわがままを言ったりすると、「仕事に遅れるから早くして! いいかげんにしなさい!。」と、これまた仕事に遅れたくない自分の思いを子どもにもぶつけていました。すなわち、腹が立っている時というのは自分が疲れている、自分が仕事に追われている、自分のことをしているのに何かを頼まれるなど…お分かりのように、全部自分が主語なんです。自分のことで精一杯で、周りのことは見えていません。『はたはたの者を楽にする』や『人を助けて

我が身助かる」と仰せられている神様の思いと全く反対のことをしていたのです。

ところが、両親からの頼まれごとを素直にしたり、自分のこともあるけれど一旦手を止めて、旦那や子供のことを優先している時ほど、物事が上手くいくことが多いのです。自分のことをしている時と忙しさは変わっていないのに、むしろ更に忙しくなっているかもしれないのに、不思議と物事が上手くいっているのです。

仕事でもそうかもしれません。自分の仕事は少し置いておいて、頼まれたことを優先する時の方が、スムーズに仕事が終わったり、思いがけず手伝わってもらえたりします。仕事がたまっているようで、何とかこなっています。そして、そういう時の心は落ち着いていて、思い通りに進まないことがあったとしても、「まあ、しょうがないか。」と捉えることができず。心にゆとりがあるのです。自分のこともあるけれどほんの少し手を止めて相手のことを考えるその心こそ親神様が望まれている心遣いです。人が喜ぶ姿を見て自分も喜べる、特に我が子が喜ぶ姿を見るのは最大の喜びです。「余裕がない」のではなく、自分自身で余裕をなくしていました。一人でいろいろなことを抱えながら頑張っている時よりも、

人と関わりながら過ごしている時の方が心に余裕があり、忙しいながらも事が進んでいるなあと、渦中にいる時は分らないけれど、ふり返ってみると「これでよかったんだ。」と思えるのです。これも頭では分かっているのですが…難しい…やれやれ。

―長くの道すがら 照る日もあれば 曇る日もある 雨も降れば 風も吹く どんない日もある これから聞き分けて心たつぷり 大きく持って 治めば 治まる―

これは修養科時代、心に余裕がなかった時に担任の先生にいただいたお言葉です。特に「心たつぷり」という言葉は心の水が揺れていて、潤いながら満たされているイメージがするので好きな言葉です。何度もこの言葉に励まされました。この言葉を見る度にどんな時も、心たつぷりと大きく持って通らせていたきたいと思えます。

もう一つ、私の好きなお話の一つに『栗の節句』があります。その中の、

「人間も理を聞いて、イガや渋をとったり、心にうまい味を持つようになるのやぞ」

というお言葉を修養科中に読んだとき、「深いなあ。」と思いました。て時が経って今再び読んでみると、「更に深いなあ。」

と感じられました。栗を食べるためには、イガを取って、実を四十分ほどお湯につけ、皮をむいて、渋皮を取って、更に鬼皮を取って、渋みを取るために沸騰させ、重曹を入れて…という作業を二回ほど繰り返します。美味しい実にすぐにはありつけません。手間や時間がかかります。

しかし、手間や時間をかけて実にありつけた時の美味しさは格別です。それと同じように、今日明日の話ではなく、時間をかけて自分のイガや渋を取りなさい、心に上手い味わいが持てるように神様や人ためにさせてもらいなさい、そう神様が仰っているのかなと私は悟りました。私はイガだらけ、渋だらけですが、神様の理を聞きながら時間をかけてイガや渋を取り除いていきたいです。

船場大教会初代会長梅谷四朗兵衛の妻、たねさんがお諭しいただいた、

“どのような道も 皆々五十”年の間の道を手本にしてくれねばならんで。今の難儀は末の楽しみやで”

このお言葉を見ると、しんどいなあと感じていても、また明日から頑張るか！と思えます。今私の難儀なんて初代の先生方と比べると難儀と言えないほど小さいものです。また、世界で起こっていることからすると本当にちつぽけなもの

です。歩く、見える、話す、食べる、用を足す、イライラを当てることのできる家族がいる、愛しい息子がいる、帰る家がある、仕事がある…この状態のどこがしんどいのでしょうか。幸せでしかないと思います。

それでも、ちつぽけながらも仕事や家庭でいろいろなことが起こり、不足が出てしまいますが、不足を言うことはだめだと言ってしまうと、自分を全て否定することになってしまふと思います。なので、不足を言ってしまう弱い自分を受け止めながら、そしてそんな自分と向き合いながら、そんな中でも楽しく、素直に、**“今の難儀は末の楽しみ”**とあるように、どんな楽しみが待っているのか、栗だけに、びっくりするぐらい楽しみに、少しでも神様が望まれる心遣いで、先を案じるのではなく、目の前の幸せに感謝しながら日々通らせていただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございます。

【みちのとも 183年(2020)9月号】より転載

特集 いま薦めたい II お道の本 II

『柏木庫治教話集』一〜四 柏木庫治

芝 太郎

はるのひ分教会長

果敢な行動と卓抜した発想から
生まれる教話を味わう

信仰といえば、まず神や仏が思い浮かび、それを信じるかどうかという問題になりがちですが、私はむしろそれらは後々の結論ではないか、大切なのは人生をどう生きるかであって、この最も大きな課題に答えようとするのが信仰ではないかと考えるようになりました。

そして、もしそうであるならば、好むと好まざるとにかか

わらず、信仰とは、すべての人々にとつての第一基礎であつて、信仰を避けて通るなんてそれこそ信じがたい話ではないでしょうか。

「どう生きるか？」は、「物事をどう見るか？」によつて決まります。

そのとても分かりやすく説得力のある話が、『柏木庫治教話集』の冒頭からいきなり始まつて、私たちをぐいぐい引き込み、著者の果敢な行動と卓抜した発想によつて次々と展開していきます。

たとえば、第1巻に収録されている空の話。「空にはどんな理があるかと言えば、跡を残さないという理が一番ハッキリしている」と著者は述べます。「跡を残さないとはどんなことかと言えば、空には、カラスも飛ばさずスズメも飛ばさず、鉄砲の弾も飛ばさず矢も走る、飛行機も飛ばさず、煙は常に流される。しかし一度通つてしまつたら、どこをどうして通つたかとやら、少しも跡形を残さない」

私は度肝を抜かれました。人類始まつて以来、それこそ無数の人々が毎日空を見てきたであろうに、これまで空をこのように見た人があつたであろうか？ しかし、言われてみれば確かに空には何が飛んでも通つても跡形が残らないので

す。もしも残ったら、この世は真つ暗闇になってしまう。

さらに著者は付け加えます。「空には、鳥の飛んだ跡も蚊の飛んだ跡も、不愉快なる跡は消えて何も残らないが、輝かしいもののみは厳然として常に光を放っている。太陽は万古に輝いている。月は白く清く光っている。星は美しく空いっぱい点に点在している。美しいもののみ輝いているのが、空の理である」

なるほど、朝にはまばゆい光に目を覚まし、昼には近くに気を配り遠くに眺めをやり、夜には月や星を楽しめるのは、空がいつもからつとして、しかも太陽や月、星々のみが輝いているからにほかなりません。しかし当たり前と言えばそれほど当たり前はないのに、これまで誰も気づかなかった。そしてその価値をこんなに褒めたたえた人はありませんでした。

なおいっそう驚嘆すべきは、著者が単にこれらを教理論として述べるに留まらず、おたすけのうえで実践されたことです。この空の話のなかで、著者は知人の松木氏と、松木氏が特に目をかけていた一村という書生の話を紹介しています。

真面目に学業に取り組んでいた一村が、ある事情から身をもち崩し、松木氏の前から姿を消します。その一村の態度を、

松木氏は「あのろくでなし」と、事あるごとに非難するようになります。しかし、著者が諄々と理を論じ、「黒線を留めず、輝かしいもののみを残す。そこに大空を胸にした男の理があるのです」と話すことで、松木氏の心が切り替わる。そして一村との関係も復元され、二人の運命は180度好転したことになるのです。

教祖のお導きを頂きながら、感性―思案―行動・表現のこの三位一体のレベルアップに挑戦し続けた著者に、私自身、少しでも近づきたいと願ってやみません。



☆お知らせ☆

☆9月26日(土) 9時 本部月次祭 (帰参は控えて教会、詰所、家庭で遥拝)

☆9月29日(火) 18時 詰所祭

☆10月4日(日) 10時 女子例会

☆10月11日(日) 9時半 おぢばがえりひのきしん・男子例会(詰所)

☆別席日 8時 教会出発

☆10月18日(日) 10時 女なりもの勉強会(他教会の方優先)

☆10月22日(木) 前日準備ひのきしん、神名流し(夕つとめ後)

☆10月23日(金) 11時 <<秋季大祭>>

☆以下の行事、今から心つもりと準備を!

☆11月3日(火・祝) 10時 女子おつとめ総会

☆目的、目標は、①新人勧誘 ②新役割挑戦 ③現役割熟達

☆11月23日(月・祝) 11時 手揃い月次祭

◇千人鼓練習 10月10日(土) 11日(日) 13時

☆人生とは、生涯かけての心の成人・自分創り

そのために、用意されているのが

・おぢばがえり ・基礎講座 ・別席 ・三日講習会 ・修養科 ・講習

○修養科をおすすめしましょう! (毎月、25日までに申し込み)

・若い方=これからの人生の基礎固めとして

・年配の方=人生の美しい集大成のために